

博士論文（要約）

河川をめぐる知識と権力：オランダ連邦共和国における河川行政の展開

中澤 聡

本論文は四部により構成される。第1部では近世以前、古代から中世までの河川に関わる制度、組織および技術を記述する。

第1章では、狭義の治水の側面に焦点を絞り、後のオランダ連邦共和国を構成するライン川下流域において、中世の開墾運動を契機として治水管区が誕生、発展していく過程を詳述する。ここでは治水管区が特権を与えられた自治組織であり、自治都市や大学などと並んで中世の封建制度を背景に発達した分権的制度であったことが確認される。

第2章では、通商路としての河川利用の実態を検討する。封建化の過程で河川利用に関する諸権利が特権として諸侯や諸都市に分配されていたのに対し、自然河川の河道そのものは原則的に治水管区の管轄外であり、沿川土地所有者の私権に委ねられていた実態を確認する。

続いて第2部ではいわゆるオランダの黄金時代、17世紀から18世紀初頭にかけての時代における河川管理の諸問題とそれへの取り組みが論じられる。

第3章では、17世紀初頭に成立したオランダ連邦共和国の国家体制が論じられる。中世の封建国家とも近代の国民国家とも異なる共和国の財政と意思決定の機構を理解することは、この時代の河川管理を理解する上でも不可欠である。

第4章では、スペイン・ハプスブルク家に対する反乱から共和国に成立に至る戦乱の時代に、河川の問題が第一義的に国防の問題として捉えられ、そしてそれゆえ国防を司る連邦機関によって河川への介入が試みられたことを指摘し、それらが不十分な結果に終わった原因を分析する。

第5章では、18世紀初頭に実現するライン川の人工河道、パネルデン水路の開削に至る過程を検討する。この完成によってライン川諸派川の状況は大きく変わることになり、このことが18世紀における河川への取り組み全ての出発点となる。

第3部では18世紀前半、オランダの初期啓蒙主義時代における河川管理への取り組みが論じられる。

第6章では、18世紀初頭の共和国が直面した深刻な財政危機が共和国の統治機構の抜本的な見直しを求める気運を醸成したこと、この時代には政治や文化の面でイギリスの影響力が増大し、科学の分野ではニュートン主義が一世を風靡したこと、そして河川管理の分野では、新しい定量的かつ科学的なアプローチが登場したことを論じる。

第7章では、第6章で論じた新たな動きの具体的な帰結として、18世紀前半にライン川とマース川の下流部であるメルウェーデ川での水害の問題から発足した専門家委員会の活動に焦点を当てる。この専門家委員会の報告書に登場する様々な論点は以後の治水をめぐる議論の指針となり、繰り返し参照されていくこととなる。

第8章では、18世紀に登場した河川に関する自然主義的理解を水理技師コルネリス・フェルゼンの著作と中心に紹介する。フェルゼンは当時の河川の荒廃を人為的介入の結果であるとする、専門家委員会の報告にすでに現れていた理解を発展させ、これと対置される「健全な河川」を理念化することになる。

18 世紀末に向かって、オランダ社会では衰退する経済と国家機構の立て直しが急務となり、様々な改革運動が革命に発展していく。第 4 部はこの時代における河川の問題が扱われる。

第 9 章では、1747 年に起こったオラニエ維新が河川行政に与えた影響を論じる。オラニエ家を総督職に復帰させ、第二次無州総督時代に終止符を打った維新により、河川行政の文脈では「健全な河川」の理念に対する反動がもたらされる。

第 10 章では、空想的と批判された「健全な河川」の理念に基づく河道改修に代わって提唱される諸計画、とりわけ側方分水計画の検討が中心となる。またこの時代にはホラント科学協会やホラント州河川総監といった制度が創設されるが、これらの制度が河川計画のプロパガンダのためにいかに利用されたかも分析の対象となる。

第 11 章では、プロイセンからの外圧によるビーラント捷水路の実現を背景に行われた、第二代河川総監クリスティアーン・ブルニングスによるライン川諸派川の流量測定事業について論じる。これはライン川で行われた初めての本格的な流量の実測であり、ライン川の河川管理における一つのメルクマールとなる出来事であったと言える。

第 12 章では、18 世紀末の革命と河川の問題との関係が論じられる。この時代には革命運動を推進していく愛国者と学協会、そして水理技師との間に微妙なオーバーラップが形成され、それが革命後の新しい河川行政機構に繋がって行くことになる。

以上の議論を踏まえて、結論では側方分水計画を国家による治水への展開の中に位置付けるとともに、国家による治水と側方分水計画をめぐる論争の文脈の中に、科学的治水への取り組みの位置付ける。